**町並み保存地区**

竹原は、製塩と酒造りで有名な商人街として350年の歴史があります。かつての町の商人たちの成功は町並み保存地区で見ることができます。

江戸時代（1603〜 1867年）に建てられた、保存状態の良い家屋。町並み保存地区の長さ500メートルのメインストリートである本町通りには、両側に伝統的な木造の商家や格子窓や粘土瓦が特徴の家屋が並んでいます。歴史的建造物のコレクションから「安芸の小さな京都」（安芸は後に広島県となる当時の地名）として知られています。

家は地元の商人の富を反映しています。それぞれに独自の格子デザインがあり、3つの異なるタイプに分類できます。格子のデザインは、3つの異なるタイプに分類できます。1階でよく使用される出格子。平格子と塗り格子。江戸時代の終わりに向けて、格子技術の改善により、縦型のデザインだけでなく、横型の鉄棒のデザインも埋め込むことができました。

町並み保存地区これらの歴史的建築の良い例は、吉井家の旧邸と松坂家の旧邸です。吉井邸は竹原に残っている最古の家で、1691年に建てられました。もともとは裕福な塩酒商人の家でした。

松坂邸は1820年代に建てられ、1879年に全面改装されました。外観には瓦葺風の緩やかに湾曲した瓦と、精巧な格子が施されています。庭園は、借景（しゃっけい）の伝統に西方寺の景色を取り入れています。東アジアの庭園デザインの借景というスタイルは、庭の構成に背景の景観を組み込むものです。

江戸時代（1603〜1867）、竹原は製塩の中心地となりました。その広くて浅い湾は、瀬戸内海の極端な満潮と干潮のために塩の生産を助長しました。製塩業者は、近くの阿古町から塩を効率よく生産するために、「入浜塩田」と呼ばれる製塩方法を採用しました。 1650年、塩の処理と塩の貿易の発展を支援するために、町の中心部に運河が掘られました。また、塩は瀬戸内海から北前船（北前船）で輸送され大阪に送られ、その後江戸（現代の東京）に送られました。船は当初、南に向かい、関門海峡（本州と九州を隔てる水域）を経由して本州と九州の間を通過し、その後、北に向かって日本海沿いの港に向かい、北日本の秋田県と北海道県に向かいました。これらの船は、この時期の貴重な品である米を持って竹原に戻ってきました。 2019年、竹原は北前船の寄港地として日本遺産に指定されました。

現在、竹原の歴史的建造物のいくつかには、地元の伝統工芸品を販売するレストラン、カフェ、工芸品店があります。おもてなしのしるしとして、住人は家の外に花を咲かせ、地域への訪問者を歓迎します。これらの歴史的建造物群から、町並み保存地区は1982年に日本政府により重要伝統的建造物群保存地区に選ばれました。